

佐藤俊之先生のご逝去を悼む

東京大学整形外科 津山直一



今年4月20日桜の花が散りつくした頃、佐藤俊之先生が晩年の数年を病まれた脾臓病の為に逝去になったという報に接した。わが国リハビリテーション界の先達であり、東大整形外科教室の同窓の先輩であり、常に誠心私達を指導して下さいたあの先生に再びお会い出来ない悲しみの思いと共に、ここに改めて先生の歩まれた道を振りかえる次第である。

先生は昭和5年千葉医科大学を御卒業ののち、昭和9年に東大整形外科教室に入局、故高木憲次先生の門に入られたのであるが、先生のお言葉によれば昭和9年の日本医学会総会で高木先生が行われた「整形外科の進歩とクリュッペルハイム（肢体不自由児療育施設）」と題する特別講演を聴かれ、高木先生の温顔とお弱そうな体軀の中に秘められた不幸な子どもたちに対する火のような愛情と鉄の闘志に心を強く打たれ、この道に進もうと決意された由である。大学ご卒業後数年にして肢体不自由児・者の為の道を選ばれ、その道を生涯変えることなく師と同じように火のような愛情と鉄の闘志を持って歩みつづけられた純心一徹なご人格には真に敬慕の念を禁じ得ない。

日支・太平洋両戦争には再度応召、前後8年に近い歳

月を大陸に、南海に従軍、九死に一生を得るご苦労の後ご帰国になり、敗戦の故国の虚脱の中に郷里の村に病院を建設、無報酬に近い奉仕の奮闘をされ地域医療に務められる傍ら、恩師高木憲次先生の肢体不自由児療育事業を全国的な規模のものにし、国家の事業にする運動に協力尽瘁され、自らの郷里広島県内にも整形外科や肢体不自由児療育の啓蒙のご努力ののち、昭和28年には肢体不自由児施設若草園を設立、その後も義肢装具の最近の進歩が切断者にすぐに応用できるように義肢装具の講習会を定期的に開催され、職能評価のためのタワー法のわが国への紹介普及、広島県脳性麻痺研究グループの育成、広島県リハビリテーション協会の発足、重度障害者「ときわ台ホーム」の建設等々、野にあって地方にあって何物にも屈することのない気概をもって、肢体不自由児・者の福祉、社会復帰のために半生を賭された。

地方におけるお仕事だけでなく日本肢体不自由児協会のためにも理事として常に建設的な尽力をされた先生は、よく「自分は高木憲次先生の在野の弟子で、森の石松である」といわれたものであるが、先生のなしとげられたお仕事をふりかえる時、真に恩師の衣鉢を継ぎその志を共に貫き通そうとされた純粋さを感じるのである。先生は歩まれた自分の道をふりかえて昭和48年に「師の蔭に一野武士の半世」と題する小著を公刊されたが、この書は気骨と至情をもって在野の一生を捧げた先生の面目をあますところなく伝えており、是非皆様に機会があればご一読戴きたく思う書である。

先生は齒に衣を着せぬ率直な方であって、信念は憚るところなく中央に対し、官に対し直言されたが、そのお言葉には常にまごころがこもっていたので、一目も二目もおかれた。私共教室同窓にとっても温情をもって後輩に是々非々を明らかに示される良き先輩であった。

先生のご享年74歳は今日では長寿といえない。まだまだご健在でわが国リハビリテーションの指導者としてご活躍戴きたかった。先生のご生涯に対する敬慕の念と共に先生を追悼する。

(昭和51年6月25日)